

## 自分のヒマラヤ登山を実践しよう

尾形好雄

### 近くなったヒマラヤ

最近の国際社会における日本の立場の変化は著しく、とくにここ15年間の変わりようは目覚ましい飛躍ぶりが窺える。15年前の日本人1人当りのGNPは5000ドル程度であった。それが昭和57年にはついに1万ドルを越え日本は「1万ドルクラブ」の仲間入りを果すまでになった。現在の円レートで考えると、今やそれは1万5000ドル以上にもなり、先進国の中でも堂々のトップクラスである。こうした背景の中でもたらされた最近の円高ドル安傾向は、我が国の海外旅行熱に益々拍車をかけ、今や空前の海外旅行ブームを醸し出している。ちなみに昭和61年に海外へ出かけた日本人旅行者は約500万人と云われる。これ程世界に羽ばたく日本人が多くなった中で、ヒマラヤを訪れる登山者の数はどの位であろうか。昭和61年に6,000 m以上のヒマラヤの高峰登山に出かけた登山者は353人である。これ迄に最も多かった昭和56年でさえ526人であるから、こうしてみるとヒマラヤの高峰登山に向う登山者は、せいぜい全体の0.01%弱といったところのようである。この出やすい環境下であって、もっとあの素晴らしい神々の座に見参しても良いと思うのであるが……。

私が15年前に初めてヒマラヤへ出かけた当時、既に外貨(ドル)は1ドル360円の固定レートから変動相場制に移行されていたが、丁度、運悪く第一次オイル・ショックが起って世界経済がパニックに陥ったときであり、1ドルが約280円位に上がってきて焦燥感にかられたときであった。このときの円安ドル高は1人70万の個人負担金で4人で出かけた小さな隊にとっては、かなり手痛かった。

しかし、その後は前述したように円は変動しながらも確実に高くなり、今や15年前の2倍以上の強さをみせている。そしてアメリカドルにリンクしているネパール・インド・パキスタンのルピーや中国の元もドル安と共に安くなってきているのである。ちなみに昭和63年1月現在の外貨レートをみると1US\$(約128円)、1ネパール・ルピー(約6円)、1インド・ルピー(約10円)、1パキスタン・ルピー(約7円)、1中国元(約35円)である。15年前(昭和49年)のネパール・ルピーが約26円であるから現在は4分の1以下である。インド、パキスタン、中国もほぼ同様である。

この外貨レートの変遷を見ただけでも今や日本からヒマラヤへは経済的に非常にしやすい良き時代と云えそうである。確かにこの間現地の物価上昇もあるのでこのレート通りにはいかないとしても、確実に現地の通貨は安くなってきているのである。

例えば、中国では昭和54年に中国ヒマラヤのオープンを発表し、翌55年に日本から初のチョモランマ登山隊が出かけた。当時、中国の1元は165円であったため、登録料、都市滞在費、人件費、輸送費といった諸々の中国国内経費を円換算すると結構な額となった。ちなみに当時のチョモランマの登

録料は約66万円、チベットのラサに於ける1日の滞在費が1人約4万円と云った法外な料金であった。ネパール側のサガルマータ登録料が約30万円でカトマンズのホテル代がせいぜい1,500円位の頃であるから、オープン当時の中国登山は「高い」と云うイメージが定着してしまった。しかし、あれから8年が過ぎた今、1元は約35円なのである。約4分の1以下まで下がってきているのである。確かにその後、一部料金の値上りはあったが、それでもオープン当時に比べたらはるかに安く、個人レベルの遠征が可能になった。

中国の場合、北京迄の航空運賃が距離の割には高いため（この路線にはディスカウント・チケットが無く各社統一料金なのである）北京入境だとうとうベースが高くなってしまいが、それでもチベットやウイグルのような遠隔地を除けば四川省や青海省などでは意外と廉価な遠征も可能なのである。例えば香港から広州経由で四川省のスークーニャン山群に入った場合、ヨセミテに行く費用ぐらいで中国の大岩壁登山が満喫出来るのである。そろそろこの辺で「中国は高い」というイメージを捨て、一度、中国登山協会の費用徴収規程を片手に自分の夢を試算されてみてはいかがであらうか。

（但し、新しい地域の未踏峰などに欲張ると法外な初入域料なるものが徴収され、それだけでもかなり割高になるので注意されたい。）

また嬉しいことには航空運賃などはこの15年間殆ど変わっていないのである。変わっていないばかりか、路線やキャリアーに依っては安くなっているところさえある。この15年で日本の給与水準は上がり、それ以上に物価水準も上がったが、航空運賃はほとんど変わっていないのであるから誠に有難い事である。

そして、今はヒマラヤ諸国を取り巻く政治情政も一部で紛争はあるにせよ、アフガニスタンを除くヒマラヤ6ヶ国（ネパール、インド、パキスタン、ブータン、中国、ソ連）はいずれも外国登山隊に門戸を開放しており、我々の対象は大きく開かれているのである。

さらに、第2次ヒマラヤン・ブームとなった昭和45年以降、ヒマラヤへ出かけた我が国の登山隊は61年まで実に718隊にも及び、このヒマラヤ登山の蓄積が豊富な情報として登山者にフィード・バックされるようになり、昨今では、自分達の知りたい情報はいとも簡単に入手できるようになっている。

このように経済面、門戸開放、情報収集といった点では、今やヒマラヤ登山はひと昔前とは比べものにならないほど出やすい環境になったのではなかろうか。こうして見るとヒマラヤはより身近になったといえそうだ。しかし

しかし、時が流れ、時代が変わっても仲々難しい問題が、休暇と家族の了承であらうか。この2つの難関は、登山行為が未だに社会悪視されるような風潮の中では直ぐに解決されることは難しいであらう。登山が日本の社会土壌の中でもう少し陽の当る市民権が得られれば少しは好転するのであろうが、当面は本人の飽くなき熱情と努力で自らこの障壁を乗り越えていくより他はなさそうである。いつの世でも己れが飛翔しようとするときに、良しにつけ悪しきにつけ妨げになるのは家族と仕事である。従ってこの2つの難関は時代が変わろうとも余り変わらないであらう。この問題を取り敢えず別にす

れば、今やヒマラヤへは非常にやすくなっているのは確かなようだ。これだけ良き時代に恵まれるようになったのであるから、我々ももっと自由な発想で、自分達がどんな山登りをしたいのか、登山目的を真剣にとらえ、自分達の満足する真の登山を描き、そして実践してみてもどうだろうか。

遠征登山という事で余りにも大袈裟に構え過ぎて登山とは別な次元の準備に多大の時間と労力を費やして、出る迄に苦勞し、拳句のはてに「日本を出れば九割成功」と云うような遠征はもうそろそろ遠慮してもよいのではなからうか。登山の原点に還ってもっと山に対して時間を割くような遠征を考えていくべきではないだろうか。

また、意にそぐわないといつつも寄らば大樹の陰とばかりに大きな遠征隊にくっついて行って、やはりつまらなかったとグチるのであれば最初から行かないほうがましであろう。前述したように現在は休暇が大きな問題なのである。休暇が取り易いから、負担金が安いからといって大きな遠征隊に飛びつければ結果はどうであれ、1回は1回の遠征なのである。今の社会土壌から勘案すれば、例えつまらない遠征に終わったとしても次の遠征迄は少なくとも何年かは勤続先に対して冷却期間が必要なのではなからうか。そう考えるとやはり1回1回の遠征は大切にすべきであろう。ヒマラヤだって国内山行と同じように行きたい地域なり、登りたい山を良く吟味して、それをどう料理するか舌なめずりしながら計画を煮詰め、そして実践するような登山本来の姿をやはり忘れるべきではないと思う。そして今は、個人レベルで幾らでもそれが実現可能な良き時代なのである。

#### ヒマラヤのとらえ方

日本人のヒマラヤ登山の位置づけの特殊性として、航空チケットの値段がヒマラヤを近くしている。と良く云われる。確かに日本からヨーロッパへ出かけるよりもヒマラヤへ出かける方がチケット代は安いかも知れない。もっともヨーロッパだって格安チケットはあるのだから一概にそうとはいえないが、極東の日本からヒマラヤは時差にして3時間程の至近距離にあることは確かだ。

欧米人はアルプスの雪嶺で経験を蓄積してからヒマラヤを訪れるが、日本人はそういう経験も踏まわずにただ近いというだけで直接ヒマラヤへやってくるから事故が多いのではないかと指摘する人も居る。

確かにヒマラヤの高峰登山における日本人の遭難事故は、「登山研修」(Vol. 2)にも述べた通り、昭和42年から20年間連続して遭難事故が発生しており、その死亡率(入山者数に対する遭難者の割合)は、約3%と云う驚くべき高率となっている。唯、その38人に1人の割合と云った数字が諸外国隊と比べてどうなのかは、他国のデータを見聞していないので何ともいえない。いえる事は魔の山と呼ばれる谷川岳の遭難事故などよりは、はるかに高い死亡率である。

富士山よりもモンブランの方は高いし、この約1,000mの高度差は大きいかも知れない。また、日本では経験できない氷河もアルプスには横たわるし、何よりも岩・雪・氷の山塊構造の厳しさが違う。そういう点からいえばアルプスで培える経験は大きく有利な事に違いないし、出かけれるのならアル

プスでの経験も積まれるに越した事はない。

しかし、だからといってアルプスの経験が無いからヒマラヤの高峰登山で事故率が高いというのは性急すぎるような気がする。

山は低くとも、氷河はなくとも、それなりに努力すれば国内山行でも十分に経験は積めるし、鍛錬もできる。要はヒマラヤの高峰登山をどのようにとらえるかの違いではなかろうか。

アルプスと日本の山ではその山塊構造の違いからか、それとも民族の考え方の違いからかいずれにしてもそこに発祥した登山観は違うようだ。アルプスは夏といえども氷雪の世界があり、頂に到達するにはそれなりの技術、経験が必要であり、それらが乏しい人はガイドのような他の力を借りなければ頂に立つ事はかなわない。この険しい山塊ゆえにアルプスでは昔から山と下界の間には一線が引かれ、山は厳しくも崇高なアルピニストの世界として受け入れられてきたのではなかろうか。それ故にアルプスでは山岳ガイドが特殊技能者として社会に容認され、国が厳しい国家試験でプロ・ガイドを認定し、養成している。このような社会土壌であるから登山も陽の当る市民権を得られるのであろう。我が国の登山に対する社会の風当たりとはこの辺のところから根本的に違うようである。

一方、日本の登山はどうだろうか、古くから各地の霊山では講中登山が行なわれてきたし、猟師、山師、きこりなど山を仕事場とする人達はそれぞれの獲物を求めて山々を歩き回ってきた。そしてそれほど険しい山容でない日本の山では往々にしてその足跡は山頂にまで及んだ。

その後、欧州から近代アルピニズムなる模倣思想が持ち込まれ、日本にも山に登る事を目的とする登山が普及されるようになった訳だが、それでも日本の多くの人にとっては所詮「山は誰もが歩いていける場所」でしかなかったのであろう。島国でその大半が山岳地帯で、その山岳地帯もせいぜい3,000mクラスという日本では、山は身近なフィールドであり、これは無理からぬことである。夏の剣や穂高が室堂や上高地と何ら変わらぬ世界として多くの登山者で賑うのもそのためであらう。

こうした土壌の中で育まれた我々の深層心理の中には、山を身近なものとするあまり安易にとらえがちな面があるのではなかろうか。

日本の山の高度をヒマラヤに当てはめて考えた場合、語弊があるかも知れないが、極端ないい方をすれば、ベース・キャンプに至るアプローチで通過するような所ということになる。それを山ということと同じレベルで考えたり、思い込んだりするところに大きな落とし穴があるようだ。

ヒマラヤの高峰登山に行こうとするのに肝心の山の方を意外とこの程度のレベルでとらえているような人も多いのではあるまいか(意識するしないにかかわらず)。

例えば、久しく山から遠ざかってきた人が、所属する山岳会(部)や岳連・学校などの記念事業なんかでヒマラヤ遠征の計画が持ち上がると、「俺も一度は海外の山へ」とばかりに参加するケースがある。久しく山から遠去かってたという事は、己れの肉体と精神から山の厳しさが抜けており、代りに離れていた分、歳だけはとっているのであるから余程の覚悟を持って取り組まねばその夢はかなわぬ

どころか、惨めな結果に終るであろう。しかし、それを悟って以前バリバリ山行していたときのように山へ行き、日常トレーニングに汗を流す人は少ないのではあるまいか、もっとも山行や日常トレーニングに昔のように汗を流したいと思っても日々鍛練した身体を保っておかなければいかに過去に経験があるろうとも一朝一夕に復元はしないのだから急に始めたところで無理なのである。こうなるとこれはヒマラヤの高峰登山ではなくヒマラヤをダミーとしな海外旅行というべきものであろう。それはそれでその事をきちんとして出かせるのであれば問題も無いのであるが、目的意識を取り違えているにもかかわらず、ベース・キャンプにたどり着くや意外と山が低く見えたりして（勝手にそう思いこむのであるが）つい色気を出して死の地帯に足を踏み入れるような人がいる。特にこういう場合、歳を重ねれば重ねるほど諫める人が少なくなるのでご本人自身が良く自分をわきまえて参画する心がけが必要ではあるまいか。30歳台後半から40歳台の人達が特にこの受入れが難しいのではなからうか。このように海外へ出ることが主で山の方が従といったまさに本末転倒のようなヒマラヤ登山をやっていたのでは、チケットの値段がヒマラヤを近くし、それが事故を誘発する一因にもなっているのではないかと批判されても致し方ないような気がする。

次に、東北や北海道など北国の人達とヒマラヤの話をしていると「俺達は雪国で雪には慣れているし、雪には強いから、雪のルートを選びたい」という事を良く耳にすることがある。これなどもやはり我々の山を安易にとらえがちな一面ではなからうか。

雪のルートを求める、という背景にはルートをのぼし易いという考えがあるからなのであろう。そして日常の生活体験や山行を通じて雪と馴染む機会が多くなればなおの事、雪は組み易いと思うのかも知れない。しかし、この考えは少し不遜ではなからうか。確かに雪のルートは技術的に易しいかも知れないがリスクは大きいのではないだろうか。様々に変化する大自然界の力には測り知れないものがあり、人間の非力さとの間には次元の異なりを感じられずにおれない。ましてやヒマラヤの場合、日本の山のように同じ山に何度も足を運んでその山の特性を体得することは難しく、大抵の場合、最初で最後というのがほとんどであろう。この絶対的な経験不足と入手できる情報不足から予知が至難ともいえる自然的要因を多く含むルートを安易に選ぶべきではない。何ともない雪面がときとして地獄絵に一変するのである。雪に強いと云う過信と困難（技術的な）を回避するあまり危険を甘受するようなルート・ファインディングは感心できない。降雪の度に雪崩の危険に脅かされるルートよりも急峻な岩稜であってもそのような脅威のないルートの方がどれほど精神衛生上良いか判らない。

登山者をヒマラヤに引きつける魅力はなんであろうか、いろんな要素が考えられるであろうが、やはり何んといってもヒマラヤの持つ絶対的な高度ではなからうか。この絶対的な高度はアルプスにもアンデスにもないヒマラヤ唯一のものであり、それ故にヒマラヤでは8,000 m峰、7,000 m峰と高みを求めて登山者が群がり、既に登りつくされてしまった8,000 m峰へ今も昔も変わらず多くの登山隊が殺到するのもその所以であろう。

ヒマラヤを目指すときに、この高さが一つの目安になるのは確かである。自分達の目標山の選定に当然の事ながら山の高さが一つの条件として加わるであろう。この目標山の選定の中においても我々は日本的な安易なとらえ方をしていないだろうか。

例えば、ヒマラヤ登山は「高度との戦いである。低酸素領域への挑戦である。」といった中途半端な認識から、大変な誤解をし、自分達には8,000 m峰や7,000 m峰は到底無理だから6,000 m峰にしようという発想がある。一見これは適切な発想のように思えるが、「8,000 m峰は無理だから6,000 m峰へ」という発想にはやはり大きな落とし穴がある。

確かに8,000 m峰登山とそれ以下の山とでは方法論が随分と変わってくるので一概には云えないが、しかし、大切な事は8,000 m峰へ行くにも、6,000 m峰へ行くにも、何れも4,000 m、5,000 mの高度を通らなければならないという事である。頂の高度にはかり惑わされていると案外このあたりがおろそかになりがちなのである。

何故これが重要なのかというと、いうまでもなく「高度との戦い」というのは4,000 m台から既に始まるのであり、この高度領域で重度の障害によって死亡したケースは沢山報告されているのである。従って、目標高度をどうするかは、飽くまでも高所経験、登山期間、隊員数、資金等その隊の総合的能力によってなされるべきであろう。

そして、ヒマラヤの高峰登山で一番大切な事は、最終目標を頂ではなくベース・キャンプに置くことなのである。従って自分達の目標高度も登って降りてこれる高度を考えるべきであろう。このあたりまえのことが往々にして忘れられてしまうのである。

頂にしか目標を置けない人は頂上を目指すべきではない。登高スピードが落ちてきているのにもかかわらず目の前の頂に惑わされて登り続ける人は、この一步一步が悲劇への道を歩んでいる事なのである。これも日本の山で培われた「調子が悪ければ下ればよい」という考えがあるからなのである。高峰登山と日本の山ではここが大きな違いなのである。高所においては、自分の体力の限界を感じて下降にかかっても、ある高度以下に下るまでは身体内部での高所反応（障害）は進行し続けるため、限界を感じてから下り始めたのでは手遅れなのである。高峰登山で大事な事は「いかに登るか」ではなく「いかに下るか」に重きを置くかなのである。

#### おわりに

今から15年前、初めてネパールを訪れてあの神秘的なヒマラヤの雪嶺と対峙したときの感激は、今でも鮮明に思い出す事が出来る。山しか頭になかった20代半ばの若者にとって、それは強烈な印象であった。あのときのあまりにも素晴らしい出会いが未だに忘れられず、その後もずるずるとヒマラヤの山々を彷徨<sup>ほうこう</sup>するようになってしまった。自分のような凡人には己れの感動を表現する言葉も無く、唯、目だけをキラキラさせて見入るだけであったが、そのとき、カトマンズのホテルで同宿した京都の仏画師は、やはり初めてのヒマラヤに大層感激されたらしく、「ヒマラヤが何故、『神々の座』といわ

れるのが良く判りました。このヒマラヤを觀たら仏教徒だろうがキリスト教徒だろうが、誰れもが神々しく感じるのではないのでしょうか。お釈迦様やキリスト様を超超する神、それがヒマラヤではないのでしょうか」といわれたのをなるほどと思って聞いたのを覚えている。

あの抜けるようなヒマラヤン・ブルーの中に峻立する白銀の峯々は、何年たっても体内の血潮をたぎらせてやまない魅力があるのは確かなようだ。

登山を柔道や剣道のように一つの“道”としてとらえるのであれば求道<sup>くどう</sup>の心を持って己れを鍛練する“場”としてヒマラヤの大自然は誠にふさわしい“場”といえるのではなからうか。この“場”を灰色にくもらせることなく自分達の登山を追い求めていきたいものである。